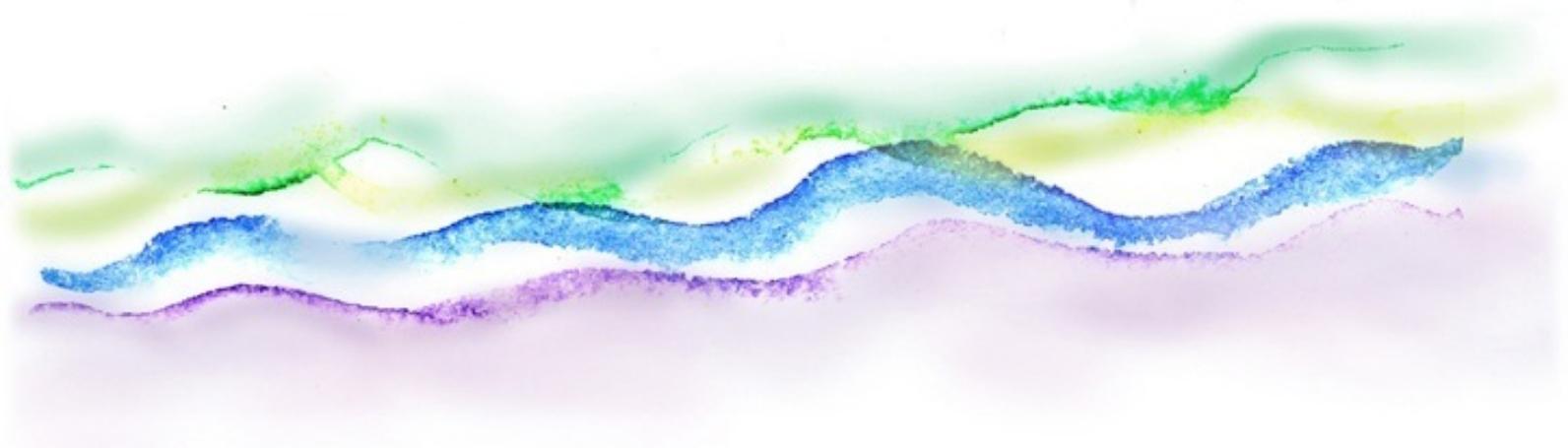




シンとヨハン
の物語



はじまり

「なかったことにし続けるのか。それとも、ありにするのか」

これが今、そらの目の前にある大きな選択肢だ。

人間というものに興味をもちはじめたのはいつのことだろう。
たぶん、産まれた瞬間からそうだったのだろうと、そらは思う。

物心ついた頃からすでに、未知なる世界への純粹なる興味が自分の中にあったことを覚えている。

真実を知りたいといつも奥底で求めていた。

だけれども、糸はもつれにもつれていった。

大人になり病気を経験することで強制的にヒーリングの道へと誘われ、
抱えてしまったあれこれから自由になるために、自分の中を紐解く旅を続けた。

そして、今、この問いである。

「ありにするのか。なしにするのか。」

何を？

そう思われることだろう。

そらの世界にふと姿を現した、ある声...

いや、正確に言えば、音として聞こえているのではない。そうだ。これは感覚の問題だ。

インスピレーション。

そう呼んでもいいかもしれない。

しかしそれは一瞬のひらめきというには具体的すぎるメッセージであり、会話であり、存在であった。

その存在はこう問いかける。

「私として、語れるか。私として、話せるか。」と

心の中に浮かび上がるその存在をガイドと呼ぶ人もいるが、そらにはよくわからなかった。

「きっとまたいつもの空想癖がでて、自分でつくっているに違いない」と言い聞かそうとする。
そうだ、勘違いだ。きっと自分で作っているんだ。きっと、思い込みだ。
大声でしゃべり続けるもう一つの声が頭の中にこだました。
すべては内面での話。

外側の現実・・・といえば、手の中から滑り落ちるがごとく
スルスルと逃げていくように思えた。
内に秘めた好奇心とは裏腹に、
その現実は何日なんとなくこなしていく、こんなもんだらうという日々。
何か大事なピースが見つからないまま、少しずつずれてしまった未完成のパズルのようだった。

夫。子ども。年老いた両親、しのびよる死。
なぜか他人事のような、質感。

自分らしく生きるとは、どういうことなのか。

「ありにしてみるか」

ある日、そう思った。
気のせいということにして、スルーし続けるのも気持ち悪く、
結局スルーできないでやっぱりなと思うのならば、いっそのこと「あり」にするしかない。
現状を変えるにはいつもと違う戦略を採用するしかなかった。

書き取ってみよう。そう思い立ち、パソコンに向かう。
何を話すのか、どんな言葉を書き取ることになるのか。
まったくノープランのまま、キーボードに手を置く。
すると、「それ」は始まった。
逃してしまわないように、ものすごいスピードで文字を記録していく。

これから紹介するのは、その記録の一部である。

夕日で染まる海岸

私に語りかけたい存在よ、どうぞ話してください。
私がすべてを書き取りましょう。受け取りましょう。

ありがとう。

はい。あなたは誰ですか？

私は地中海に住む小さな男の子でした。
名前はヨハン。
私が少年だったころの話を聞いてください。

はい。

ヨハンは、僕。僕の名前。今、僕はそう呼ばれているんだ。

僕は8歳。船が止まっている入江の砂浜が好きだ。入り江から見る夕日がとても綺麗でね、僕はいつも夕方になると一人で海岸に立ち、いつまでもそれを観るんだ。
空が真っ赤に染まって、海も赤くなるんだ。そして、冷たい海風が僕の髪を揺らすんだ。それをじっと眺めていると、僕は無心でいられる。無心っていうのは、もういろんなことを考えるのをやめてしまって、頭がすっかり空っぽになって、そうしてただ今、その時、僕はなんでもない僕になれるんだ。

こうやって、自分ってことをすっかりわすれてしまって、空と風と一緒にになったような、どこからが僕で、どこからだ風なのか、わからなくなるぐらい大地と一体になっているのが、好き。好き、といったけど、それはもう僕の一部だ。
僕の生きる時間の中ではなくてはならない、大切な時間なんだと、後から思う。その時は、ただそうしたい、そうせずにはいられない。そんな感じだよ。

友達と遊ぶ？

いいな、そんなことが僕にもできたらいいな。

もっと小さかったころ、一緒に遊んだルーンが僕の友達だけど、ルーンもまた今どこに連れて行かれたのか何をしているのか、わからない。

大人たちはみんな、僕の能力が欲しい。僕の脳が欲しい。僕の頭を使いたがるんだ。

そうして僕に「君はすごいね」と言う。僕にニコニコわらって、すりよってくる。
そうして僕をあれにつないで、一日中使いまくるんだ。

しずみかけた太陽が、僕にさようならといった。
「さようなら」

最後の夕日の紅色が濃紺の海と空に飲み込まれていく。
空気がすっと冷たくなって・・・僕は一つ深呼吸をした。

母さんと父さんはもうだいぶ前に連れて行かれた。
とてもやさしい父さんと母さんだったのに、ある日奴らが連れて行った。
父さんが頭がいいから。母さんが純粋できれいだから。そうに違いない。

そして僕はおじいちゃんと暮らしている。おじいちゃんは、毎日お酒を飲んで、泣いてばかり
いる。
僕の毎日を嘆いていくれる。可哀そうだと泣いてくれる。
でもどうにもできない自分を責めている。
だからお酒を飲んで忘れようとしているのかな？ お酒を飲んでゆっくり死を選んだのかな？

僕にはおじいちゃんのことにはわからない。
おじいちゃんを選んだ生き方・・・死に方だから、僕には何も言えないけれど、
一緒にいる時間がとてもしんどい。できれば一緒にはいたくない。
だから太陽がしずみきってしまう、ギリギリまで僕は家には帰らない。

おじいちゃんを救うことは、僕にはできないんだ。
だって、わかる？ おじいちゃんが生きようとしていないんだから。
生きることより、死ぬことを選んでいるのだもの。
僕はおじいちゃんに生きてもらいたいんだ。だってだって、大好きなもの。
おじいちゃんが笑って僕を抱き上げてくれたことを僕はちゃんと覚えているよ。
まだきっと僕が2歳か3歳か小さかった頃、おじいちゃんをよく僕を連れて散歩にいて、一緒
に笑って、空を見上げて「おじいちゃんは幸せだな」って言ったもの。お母さんが笑っていたし
、お父さんがいたもの。

ヨハン、おじいちゃんに何があったの？

世界を信じられなくなったんだ！ 世界から切り離されて、一人ぼっちでおじいちゃんは淋し
いし、怒っているんだ！信じられない、裏切りの世界を！

何があったの？あなたの住む世界に。

科学が発明したんだって、おじいちゃんは言っていた。

発明してはならなかったものを...いや、使い方を間違っただけなものをこの世界は発明し、それを人間に渡してしまった。人間はそれを使いこなすことはできない。だから永久に作り出せるエネルギーをもてあましてしまうだろうと、おじいちゃんは嘆いていた。

ヨハン、あなたは何をしているの？

朝、迎えがくるんだ。そして宮殿に行くんだ。

そこには僕が入る部屋があって、そして僕は頭に帽子のようなものをかぶるんだ。

そうして、その日言われたことを思い描く。

それがそうなるように思い描いて、そして、それをこの世界に投げるんだ。そうしたら、そうなるんだよ。

そうなる？

うん。僕がイメージしたことが、現実になるんだよ。

光の家とつながって、僕が光を通すパイプにもなるよ。そしてクリスタルにそれを入れていくんだ。そうすると、クリスタルが光を食べて、強くなるんだ。

嫌がるクリスタルもあるし、しっかりとした意志をもっているからクリスタルと仲良くなれないとやらせてもらえないんだ。僕はそれがとてもうまいんだよ。大人たちより全然上手にできるから、大人はすぐに僕にそれをさせようとするんだ。僕だって、苦手なクリスタルもあるけど、最後は結局、やるんだ。

そうでないと、王様が怒るんだ。足りなくなるんだって。

僕にやり方を教えろとっておどかしてくる大人もいるよ。無理やり自分の望みをイメージさせようとする大人もいるよ。そういう大人はどんなニコニコして近づいてきてもすぐにわかるんだ。

。

だから僕はそういう時は閉じる。入れない。だって、すぐに穢されてしまうし、僕はそういう思いの人たちと一緒に何かを作り出すつもりはないんだ。

僕がこれを行っているのは、この大好きな地球をキレイにするためで、

大好きな夕日がしずむ地球を守るためなんだ。

お父さんとお母さんもきっとそうに違いない。どんなことを奴らに命じられようとも、心の中ではきっとそうなんだ。地球を愛しているから、人々を守るために、僕らはやっているんだ。決し

て奴らの手先になったんじゃない。

だけど本当にそうだろうか……。

僕が作った充電されたクリスタルは、一体何に使われているんだろう。

僕にはそれは教えてもらえない。ただ係りの男はこういうんだ。

「人々の生活のために使われている」

「この国の人たちが豊に暮らすために必要なんだ」って。

僕、いつか、何も考えずに、動物や友達や自然の花や海や魚やイルカたちと遊べたらいいな。

毎日僕を迎えにくる男は、おじいちゃんに何かを渡している。

おじいちゃんは、嫌悪感いっぱいの顔でそれをみないようにしている。

それで、男はそれをテーブルの上にポンとおいていく。帰ってきたら、その袋はテーブルの上からなくなっている。だからきっとおじいちゃんはもらったのだろう。

仕方がないよ。きっとお金だろうけど、僕やおじいちゃんが食べていくにもお金がいるんだ。

おじいちゃんは、もっと堂々ともらえばいいのに。もらった自分を責めて、そしてまたお酒を飲むんだ。

そのお酒を、あの封筒のお金で買っているんだ。

僕にはよくわからない。

そうまでして毎日すごして、一体何がおじいちゃんの手をうごかしている力のもとなのか。

一体なぜおじいちゃんは、楽しいことをしようとしらないんだろう。

僕にはわからないよ。大人の考えていることは。

だけど、わかってることもあるよ。大人たちは頭の中を自分の考えがぐるぐるまわったままにして、そこからちっとも出ようとしらないから、光を通せないんだ。

光を通すには、光の通り道を作らなきゃでしょ。

それにはいろんな思いや考えがぐるぐる渦巻いている灰色の脳ではできないんだよ。

通り道はキレイにすっかりあけておかなくっちゃね。

僕、幸せかって？

なんだろう、幸せって。

生きているよ。こうして、前を向いている。

ただ。

…あまり笑わないな。

僕が笑ったら、光を僕の中にとどめておきたくなって、クリスタルに入れられないもの。

光を通すでしょ。そうするとね。すっきりして気持ちがいいよ。
すがすがしくて。余計な物がないっていうのは、気分いいものね。

だけど、笑ってない。だって、笑う相手がないんだもの。

幸せか？って？ うん。不幸ではないよ。

幸せか？って？

幸せって、なんだろう・・・・・・・・

ヨハンと行く草原

ヨハン、あなたのやっていることはヒーリングなの？

僕はヒーラーと名乗ってはいないよ。僕は、思考とエネルギーの使い手。けど人々を本来の姿に導くために何をすべきかはわかっているんだ。

何をするの？

では一緒にやってみよう。それが一番はやいからね。

誘導してくれるの？

そうさ。僕のやり方を一緒に体験してみてね。

まずは、リラックスして、自分の呼吸に意識を合わせるんだ。

そう。吸って、吐きながら、体の中に意識を向けて。肉体を道具として使っていくよ。

まず、小さな君が体の中にいるとして、その君は今体の中のどこにいるかな？

えっとね。。。頭の部分かな。目のあたりかな。

そう、いいよ。

じゃあ、あなたの目の前に一番心地いいと感じる景色があるんだ。何が見える？

草原。緑の草が一面に生えていて、風が吹いている。草の匂が私を包んで、気持ちがいいよ。

うん。いいね。じゃあ空をみてごらん。

空？・・・

空に意識を合わせて。空には雲一つないよ。どこまでも青色しかない、圧倒的な青空。

その空があなたがみるすべての範囲を覆い尽くしている。画面全部が青空で埋め尽くされているようにセットして。

うん。

そしたら、その青空が君たちの今の言葉でいうなら、パソコンの画面のような感じだと思って、

そこに入力できるよ。

入力？ どうやって？

ただ、入力すると意図することによって。

簡単だよ、誰の情報にアクセスしたいか、名前を入力すればいいんだよ。

入力して送信したら、青空にデータが現れるよね。その人の映像だよ。

うん。現れた。娘を入れてみた。

うわっ、左肩のところにカメみたいななんか爬虫類のような人間のような・・・なんか重たそうなものがへばりついてる。光を送りたくなかったから、そこに光を強烈に送ってみたよ。

いいぞ。その調子。

では、草原に光の柱が立っているのがみえるかな？

巨大な、真っ白い光の柱。あなたが、光の柱とパイプで結ばれているようなイメージをして。

そこからエネルギー、真っ白な純粋なるエネルギーが流れてくるよ。

受け取ったエネルギーをそのまま右の手のひらから放射するんだ。ビームを打つような感じでね

。

これはちょっと分離している概念を含んだやり方だけど、あなたの意図はきちんと届く。

ここで大切なのは、あなたの本心。娘さんを救いたいとか、治そうとか思わないでね。

「ただ本来の光であることを妨げているものが消えてなくなります」と意図してください。

わかりました。

では、もっと強力なやり方があるから、それを教えるよ。

目の前に大きな光の柱があるね。さあ、そこに入るよ。

入る??

・・・怖いかい？

うううん、だけど、どうやったらいいのか、わからないよ。

・・・あっ、誰？

今、そっと肩に手を回して抱きかかえてくれた存在、、、

もしかして、よ、ヨハン？

うん。安心して。僕と一緒にだよ。

うわっ、ヨハンって結構イケメン？

そう思う？

うん、なんか明るい茶色い髪で、すごく目がおおきくて線も細くて
なんかすごくキレイな顔で、ちょっとおちゃめで、恰好いい！

ありがとう。

光の柱には、ヨハン、あなたと入るんだね。

そう。いつも僕と一緒にいるってイメージしてみて。僕はすぐに君のそばに現れるよ。

うん。心強い

さあいこう。力を抜いて、感じて・・・浮いている感じ・・・そう、僕と一緒にだよ、
ほら、手とか足が紐のようになって、だんだんなくなっていくだろ。

そうみえるだけだから、怖がらないで、僕と行こう。

何が起こるか、よく集中して・・・身体が全部なくなったら、光の柱に同化して・・・

同化？ どうやって？ 私がなくなる??どうやって？ できないよ

・・・私でなくなるなんて、できないよ・・・

ね、眠い。ヨハン、眠い。急にものすごく・・・

ヨハン、さっきはありがとう。寝てしまった

そうだよ。たぶん横になってしまったらすぐに肉体は睡眠の状態に入る。

君たちがいつもやっているやり方がそれだから……。だけど僕がやっているのは寝ることとは違うんだ。

寝ていることにとっても似ている状態を創るんだけど、意図的に思考を動かして、思考という道を通して、エネルギーをうみ出す作業だよ。そのために思考を明け渡すんだ。

何に明け渡すの？

神にだよ。

神？

そう、万物をうみ出すエネルギーのことさ。

さっきのやり方で光の柱と融合するあたりがとても難しいというか、うまくいかない
というか、

個を捨てるということがなかなか受入れられない。怖いのかな。

執着だよ。個であろうとする執着。

大人はみんなそれがとても苦手だよ。子どもは結構みんなできると思うよ。

僕は、なぜか小さいときからとても上手にできるんだ。あの光の柱と仲良くなるのが得意なんだよ。

すごく気持ちがいいよ。……。全部が自分だってこと。

それを大人に言ってもちっともわかってくれないけれど、僕は知っているんだ。だっていつもやっているもの。

すべてが自分で僕が神さまと一緒にあって、僕が世界を創っているんだ。だから僕の好きなようにつくることができる。簡単さ。全部僕なんだから。

ほら、身体をなんにでも変えられる生き物がいたとして、

その一部をじゃあこれに変えちゃおうと思ったら勝手にそうなたっていうか。

どうしてできるのかなんて、僕は知らないし、知らなくてもできる。だって、そうなるんだもの。

ヨハン、あなたの話を教えて

うん。僕はこの仕事・・・仕事というのかな。このやっていることはとても好きだよ。大人がそれを何に利用しようが僕には関係ないんだ。きっと僕がやっていることはすごく貴重なことなんだろうけど、やっていて気持ちがいいからやるんだ。そしてぼくは願うんだ。いつもの大好きな景色がまた続くように。そうやって僕は世界を愛しているんだ。

僕の父さんや母さんと融合しているかって？

わからないよ。僕は父さんや母さんのことを探しに行くことはできない。探してみたこともあるし、届くように意図を投影して送ったこともあるけど、返事が来ない。だからわからないよ。

ヨハン。なにか書き留めてほしいことある？

うん。僕が16歳の時のこと

周りには100人を超える家来がいて、僕はもうかなりの力をもっている。僕は王様の大切な存在で、国を動かすこともできる。僕が作り出すエネルギーはもはや国にとってはなくてはならないものになっていて、多くの仲間も育てている。僕はその力を王様の庇護の元発展させて成長させ、研究していて、人々はより大いなるものへとこの力を使おうとしているんだ。

だけど、僕は個人の自我によってこの力が使用されることを拒否していたし、悪なる存在につかわせてはならないと思っている。といっても、そうでない人などどこにしようか。

人間とは、みなエゴがあり、個であり、自分が一番になろうとして人と比べて、人とを蹴落とし欲望と邪悪な支配欲に己の肉体と思考と感情をどっぷりつからせ、くさらせている。そのことに気づきもしない。これが僕の回りにいる人々の正体だと、知っているさ。

だけれども、ルーンとリーは違う。ルーンは幼馴染の親友。リーはとっても可憐な女の子。僕たちは同じ未来へむけて行動を共にしているんだ。

幼いころ連れて行かれたルーンが再び僕の前に現れたのは、13歳の時のこと。その頃ルーンは戦士として教育されていた。ルーンは戦いに向けて肉体を鍛えるという僕とは全

く違う生き方をしていた。そしてルーンはとても純粋だったよ。心の中心に愛があってそれは光をちゃんと保持していたし、とても透明できれいな体で、僕は本当にすべてをルーンと共有できるとおもった。

それからルーンと僕は一緒に過ごす時間が多くなって、今ではルーンは僕の大切な仲間だ。僕らはこの地上で光の国を創るっていう大いなる願いを持って生きている。

悪などないという考えは一理あって、すべてはエネルギーだということは出来るけれども、だけれどもね、あなたがさっき体験してとても難しいと感じたように個をなくすということは人間にとって、ことさら大人にとっては難しい。そしてなくそうなどは全く思わない種類の人たちがいてね。その人たちはなくすどころか、個の鎧をさらに強化しようとして必死で動いている。

そうやって個を主張し、自分の正しさと偉大さを知らしめようとしたときに、人はとても邪悪なエネルギーへと光を変換させることができるようになる。これはある種のフィルターとなって、愛である神のエネルギーを屈折させることができるんだ。

そして時にこれはとても魅力的に人を取りこにする刺激と強さをもっていて、権力に群がり集まる人々をまた作ってしまう。こうしてできたあるエネルギーが思考の産物となって、具現化して物質化し、地上にできあがってくる。

多くの人の想念を食べて生まれたものだから、これは手ごわい。かなりの力を持っていることになる。

さて。僕たちはこれが世界に蔓延しないように食い止めているんだ。食い止める方法は、一つ。自分が純粋なる光を感じることができる清純さをもつ存在だと認め、愛につかえ、光をこの世にもたらし続ける、ということ。

具現化した邪悪なエレメンタルには、それを無意識的に自分の中に保有している誰かが引かれてしまう、引き寄せられてしまう。一種の磁石の役わりを果たす。磁石は集まれば集まるほどにまた力を増すという吸引力を発揮する。だから大きくなるのもすぐなんだ。

けどね。大切なことはここからだ。

あきらめてはならない！

人はみな、心の中に清きものを持っている。そしてそのことを大切にしている。
なぜなら、そうあることが一番心地よいから。人が自分を好きでいられる瞬間だから。

ヨハンあなたは16歳でこのことに気がついたの？

そうだよ。そして僕は実際に行動に出ている。
僕の思考を使って、僕はこの世に光を下ろすことをし、そしてそれを人々の心に転写しているんだ。

光はこの地上に出たときに、最も心地よいものに姿を変えて、五感で触れられるものになる。
言葉になって、歌になって、絵になって、メロディーになる。それは人を変える力を持つ。
変えるというのは、邪悪なものに引き寄せられていた夢遊病のような状態から、目が覚めるということだ。

ルーンはそれを絵に描いている。
リーはそれを歌にして歌っている。
僕は光を直接光として降ろし、クリスタルに注入して、多くの人の心に意図を転写している。

これを直接的創作と呼ぶ。
人はとても元気になるよ。

おじいちゃんにもやったの？

勝手にはできない！ その人の許可がなければ、勝手にはできないんだ。
勝手に人の心の中に影響を及ぼすようなことはできない。
それは自由の侵害になるんだ。
だから僕は僕の光のエネルギーを受け取りたいと願う人たちにむけて転写する。

おじいちゃんは希望しないの？

おじいちゃんは、今の状態が好きなんだよ。
おじいちゃんに必要な時間みたいだ。
いつかきっとおじいちゃんも本当の意味で僕のやっていることに理解を示してくれるだろう。
あくまでもこれは人を変える為とか助ける為とかでやっているんじゃない。
その人の中に気づきたい、もう本来の自分、心地よいエネルギーで自分を埋め尽くしたいという願いが生まれ、
そうすることを本人が決めたときにはじめて受け入れたものが有効に動き始める。

その気になっていない人に光をおくってもその時は一瞬いいような気になるけど、変わるつもりがないのならば、本当の意味で自分を生まれ変わらせることはできないということだよ。

おじいちゃんは僕のやっていることに反対はしないけれど、そのことをどっかでわかっているんだろうね。わしにやってもむだじゃよといって淋しそうに笑うだけだよ。

自分を信じられなくなった人は、自分がもうそれを受けるに値しないとして、スタートラインにたつことをやめてしまうんだ。

けども僕はきっとだいじょうぶだと知っている。おじいちゃんは、自分の力で気が付こうとしているんだ。それが何より大切なことさ。もしおじいちゃがこの肉体を持っているときに気が付かなくてもそれはそれでいいんだ。おじいちゃがいつか気づくときに、また僕はそばにいるよ。そして、おじいちゃんにその時に光をたくさん送ってサポートするんだ。僕はそういうことになるだろうっていうことも、わかっているんだよ。

ヨハン、あなたってすごいんだね。

けど、僕だって、人間だ。今矛盾を抱えている。そこに力は与えないという意図をしっかりと持っているつもりだけどね。

あなたたちのやっていることは国の人々は受け入れているの？

もちろん、喜んでくれている。ただそれと同じか、それ以上に敵視している集団もいることは確か。

例の転写する意図でそういうやつらや現実を変えることはできないの？

それはコントロールというんだ。僕の能力をそれにつかうくらいなら、僕は死んだ方がましだ。人は邪悪になる自由もまた、与えられているんだよ。個である。ということが出来る世界だからこそ、どちらの自由も与えられているんだ。いきなり赤ん坊として生まれるだろ。お母さんと繋がって、神と一緒にだったところから、この地上に生れ落ちて一人で生まれて一人で生きていくんだ。

疑問に思うことすらできないまま、人は個であるというルールを受け入れていくしかない運命なんだ。

でもね。実は選べるんだよ。

個であることとすべてであるということは両立できるという、このとっても理解しがいただろう概念を受け入れて、

地上で絶対宇宙の中の個性として存在する嬉しさを味わうことができる。

僕たちは意図的に思考を使った生き方をやっているんだ。

思考を現実化するのに、道具はいらない。新たなる道具はいらないと言っておこう。

道具は肉体そのものだ。

人間の肉体はメインコンピューターにアクセスすることができる、端末だ。

僕が生きているこの時代は、思考と意図の力を使って、世界をつくる領域にアクセスして、そしてそこからエネルギーを引き出したり、情報を操作したりできるようになってきた。

僕がそれをしているんだけどね。

具体的に教えてほしい

さっき一番簡単な基本動作を教えたけれど、寝てしまったね。

・・・さっきのが一番簡単な基本???まじっすか。

ふふふ・

ヨハン、教えて、私もできるようになりたいよ。

きみはできるんだよ。本来は誰にでもできることなんだ。

僕らがこの街でやっていることは、いつか世界を驚かすことになるんだけど、それはもう少し後の話。

僕が18歳の時に、ついにエゴの群団、エレメンタルが世界を取り仕切ろうと僕たちをつぶしに来たんだ。

僕等はそれを本当は相手にしたくなかったけれど、でもやっぱり知らん顔をしていくことはできなくて、

直接対決の時が迫っていたんだ。

僕は光を巨大クリスタルに何日もかけてためていき、そして祈りをこめた。
意図を持たせたんだ。その光に。光が放射されるとき、意図をもって動き出すように。
そのクリスタルはのちに破壊されて僕の色を持った祈りを保持したままくだけたんだけど、
記録は保持されているままだろう。封印されている。破壊した存在たちの手によって。
この封印を解く鍵は支配からの脱却。

最近ある方のエネルギー体のメンテナンスをしていたら、クリスタルのエネルギー装置が突き刺さってた。
あれはなに？

痕跡。爆発の痕跡。
封印されたままのクリスタルがエネルギーを放出することなく、物体として、人を傷つけることができるものとして凍結されたために、それが武器となり人々の身体に突き刺さったんだ。
本来はソフトなんだけど、持っているエネルギーと情報保管システムの能力が一切使われることなく爆破させられてしまった。

この場合はつきささったクリスタルをとってしまふのがいいの？

そうだね。

封印解除する方法はないの？

人々は自分の中で僕がアクセスしている場にアクセスできる機能がある。
しかしエネルギー体に残存する遺物のせいで、スムーズにできない...磁場がくるっているという
言い方がいいかな...中心とずれたチューニングの狂いが生じている。
だからそれを取り除き、まずは本来在る姿にもどすのが先。
取り除いたクリスタルは力のある磁力があるから、それは破壊するか専門の存在に引き取ってもらう必要がある。

あの夢はそれ？

そうだね。君のはかなり大きかっただろう。

数か月前の夜、そらは、クリスタルに関する不思議な夢をみていた。
夢の中でそらは、王様からもらった巨大なクリスタルをかかえて途方に暮れていた。
隣にいた見知らぬ男に聞いてみる。

「ねえ、これどうしたらいいかな？」

すると、男ははっきりとこう答えた。

「これがあることによって、本来のあなたになれなくなっています。

もう手放す時ですね」

「そう・・・ですよ」

と答えたものの、心の中でなんだかもったいないな～と惜しむ気持ちを感じながらも巨大クリスタルを業者の人のところへ持っていく。

おそるおそる差し出した巨大クリスタルを業者はあっさりとひきとってくれた。

その場合、夢を通じて、処理は終わったことを知らされた。

個というフィルター

ヨハンおはよう。

おはよう。

ヨハンの話を聞くよ

僕の話。

僕に何があったのか。

僕たちは大きな使命を持って、国の中枢で働いていた。ルーンとリーがいて、僕はとても楽しかったよ。

僕は多くの人を救うことができた。なぜなら、その人たちが何にとらわれ、何に力を明け渡してしまっているのか、観ることができたからだ。

観ることは自然とできるようになったの？

うん。光の柱の中に入って、その光と僕が一体となると、光が僕を通して流れ出てくる。

僕はその光を光のまま、エネルギーのままというのは喜びや笑いや怒りやといった加工された第二次的屈折を経験していない純なる光のままクリスタルに降ろすことができた。

純なる光のまま降ろす。それは自己のフィルターを通さず、ダイレクトに送るということ。

どうやってやるの？

まず自分自身をととてもよく知っておくことが大切。

人はみな自分がどんな屈折をさせてその光を出しているかということに無頓着で、ちょっと悲しみの色がある方が好きな人や面白い笑いに変えることが好きな人、怒りや批判といったとてもネガティブな方向に圧縮する人もいる。

圧縮？

怒り、恨み、妬みは「悲しみ」というフィルターのさらにその後に圧縮フィルターを経てできる状態。

圧縮されているので、重たい。重たいものは肉体に近くなり、さらに物質化していく。

悲しみという感情自体を素直に放出すれば、悲しみというフィルターを通ったエネルギーとして

そのまま昇華されていく。

ところが、悲しんではいけない、感じてはいけない、という意志が投影されると、そこに蓋がされてしまう。

これを悲しみとしてだそうとするけど、一旦押し込めたものはなかなか素直には出てくれない。

そこに他の存在に同調した更なるフィルター、
それは個であろうとすることへの恐怖とあいまって
二次的フィルター、そして圧縮。
この経路をたどっている場合がとても多い。

僕の場合は、それが無いわけではないけれど、見ぬくことができる。
自分が一体どんなフィルターを通してているのかということ把握しているんだ。

だから、光を直接光として通すとき、全くのノーフィルターで行う方法も知っていて、
それは、もう教えてもらったというより、小さいころからできたんだ。
なぜだかわからなけど、僕にはできたんだよ。

それがあの光の柱に入って、個をなくして、光と融合する方法？

そう君に教えようとしているやつだよ。君はすぐに睡眠状態にはいってしまうけど、確かにそうしなければ、個であるという執着を手放すことはできないんだね。

・・・あのね、ヨハン、私はそんな高度なことを望んでいるんじゃなくてさ。
個でありながら、笑いや喜びを放出している素敵な人たちがたくさんいるよね。
私、それでいいんだけど。

もちろん、それで君がよければいいんだよ。
ただ、君はすでに気が付いてしまった。
エネルギーがどのようにしてこの地上に降りてきているかという神秘的な部分で
あなたは直接的な実験をしたいと思っている。だから僕の声をこうして聞いているんだろう。

そうなのかな。確かにもう気がついてしまった。だけど、全然有効に実生活の中で
使いこなせていないんだよ。
個をなくすなんてできないよ。

個をなくすんじゃないよ。

個という幻想を手放すんだよ。

個であるというのは、幻想なんだよ。

この地上において、僕たちは、個であるという前提で存在している。

それに同意してこの地上にきて、それをとても楽しんでいるんだよ。

個であるということに、恐れや不安を抱くと

個としてなんとか生き抜いていかななくてはならないと頑張り、

人と比べて、落ち込んだり、戦ったりという動きがでてくるね。

そうして一生を使ってその中でやっていくのもいいんだ。

そしてもう一つ、

自分は個であるという幻想をひきうけた存在だと思っているとどうなるかな？

個であるということにしがみつ়く必要はないんだ。

それは引き受けたルールであって、つまり基本ベースにもう組み込まれているから、

それ以上何かを必要ではないんだよ。

個性というのは、その人がどんなフィルターを持っていて、

オリジナルの光のエネルギーをどのようにその人を通過するとき屈折させて放出するかという

放出具合が作品となり、個性となる。

その個性が出せる存在としてすでにこの地上にいるのだから、それを人よりももっととかってしなくてもいいんだよ。

だって、何が基準でそれをしているの？

その基準をまったく違うところにおいてしまったら、

違う方向へとどんどん自分を削って磨いて、いくことになるでしょ。

あなたはそのままいいというのは、すでにあなたには、絶対に二つとない屈折度合があって、

オリジナルのエネルギー放出を行っているという点において、それは立派な個であるということ

。

それしかこの世の中にはないということ。

さて、僕の場合、この屈折度合の中において、

純粋に個というフィルターを通さない、そのまま光を通す経路となるポイントを知っていて、

意図的にそれを行うことができる。

思考とはそれができるツールであって、実は人は結構それをしている。気が付いていないだけ

でね。

あなたの中にある意図があなたの望む結果として出ていないと感じられるとき、つまり、あなたの望む現実として表れてこないとき、それはあなたが自分のフィルターを把握できていないということを意味している。

把握できてこそ、やめたり、磨いたりすることができる。

このフィルターが肉体にも影響を与えてくるけれども、まずは、その前に、自分が何を持っているのか、ということは、何もない状態というのはどういうことなのか。

個にしがみつ়く限り、フィルターがかかっていない場所はこれっぽっちもないんだよ。すべてにあなたのオリジナルのフィルターがかかっていると思ってもらいたい。そして、このフィルターは、あなたが認識した途端に形を変え始める。

さて、そらがさっきいったこと。

笑いや喜び、そういったことに変換できる人が大勢いて、自分もそれができればそれでいい。どうしてもっと仕組みまでしらなくちゃならないのかと。

そうだね。ここは面白いところだと思うよ。

未知なる探究心とでも言おうかな。

自分のフィルターを知る。とってみたらどうなるのだろうか。

もしもっと純粹なるものに近づいたら、それはどんな現実となって現れるのだろうか。

人は荷物をおろして、シンプルに存在できるとき、とても気分がいい。心地よい。快なんだね。

だから

なぜそこまで知らなくちゃならないかといえば、

「おもしろそうだから。やってみたいから。どうしても見てみたいから」・・・だね。

やらなきゃならない、なんてことは全然ないんだよ。

本当にやりたい人がやればいいんだ。

ただ何を自分がしようとしているのか、そのことをちゃんと知って、狙いを大きく。

そうか。わかってきた。

私は純粹なるエネルギーの放出についてとても興味があるんだね。

そしてこうしてヨハンの話しを聞いているということも、きっとこれもフィルターを通してのことなんだね。

そうさ。

僕が君であり、キミが僕であるとするならば、

僕たちはある種のフィルターが折り重なった面白い作品を創っているといえる。

僕たちがコラボすると、他では絶対に生まれない作品ができるんだよ。

だって、世界に一つしかないフィルターと世界に一つしかないフィルターがかけあわさっているんだもの。

面白いと思わないかい。それを光の拡張という点で掛け合わせているんだからね。

わかった。

ねえ、ヨハン。もっとあなたの話を聞かせて。

うん。

僕は夕日を見ているあの海岸での景色が好きって言ったよね。

うん。

あの夕日と一体になって、紅の空と風の匂と海と砂の感触。

そして僕は溶けていくんだ、僕はもうその時、僕なんてものではなくて、そこにある自然の中に溶けていった、

なにかわからないけどとても広がった意識で、その眼で景色を見ているという

そしてまた一方で僕という肉体がそこにあって、そこにいたまま

広大なる拡張した意識と小さな肉体という両局を同時にバランスしている状態になるんだ。

これがこの地上における経験の中の醍醐味だよ。現実の世界にでてきた僕の快感だ。

嬉しさだよ、生まれて来た一つの目的でもあるんだ。

このバランスを、意識を使って、さらに高次の次元で行う。

地上で行ったバージョンがそれならば、これを次元をあげたところでもバランスするんだよ。

この状態を伴った経験の記憶。

それが原風景という言葉が意味するところなんだ。

私の原風景は、草原なのかなあ？

私も砂浜が好き、時間を忘れて砂をほって、何かを創って、ふと気が付くと、

海の風も消えて、自分がその砂と潮騒とかもめも鳴き声と海の匂いと一体となった

感覚。

集中していて、だけど頭の中になんにも雑音がない。とても気持ちのいい状態だね。

そうだね。

君も子供のころにその体験をしている。

そしてこれは、次元を超えたキミの意識もそうしているということなんだよ

次元を超えた大いなる自分と連絡をとって、そこと一体化するんだ。

この地上にいる君が意識を飛ばして、地上をこえてやるんじゃない。

この地上にいる君という枠自体をなくすんだよ。

この地上にいる君という枠でやろうとしたら、眠るしかなくなる。

その枠は入り込めない。

その枠はあまりにも限定されてしまっていて、

もっと広大なる部分へのアクセスには邪魔となるんだ。

そら、本当のことをおしえよう、君の高次元のキミが、僕だ。

ヨハン、そうなの？ハイアーセルフってやつ？

そうともいうけど、ハイアーセルフというのはチームだと思って。

それは君の中にあるものを引き出す役目もあって、

僕たちはずっときみと連絡を取りたいと思ってきた。

そして君はこうやって、タイプするということが僕たちと話ができるようになった。

そこで、大切なことを教えるね。

僕は君と一体になれる。

僕は君そのものでもある。

君が僕に同調すれば、ことは一気に流れるんだ。

さあ、僕を信じて。

きたイメージは、私が細胞の一つで、あなたが私が所属する臓器の親分。つまり臓器自体の意識。

そうそう、そういう感じだよ。

僕たちは同じ目的のために存在しているんだ。例えば肝臓ならば、毒素の解毒というようにね。

私たちは何をしようとしているの？

僕たちは光を純粹なるエネルギー源として活用するための存在。

エネルギーをもたらす器官なんだ。うみ出すんだよ。クリエイトだ。それも純粹さを目指す。純なるものを生み出すんだ。

僕とつながって。僕に主導権を明け渡して。それでもきみが壊れてなくなってしまうことはない。

君が自分だと思ふ世界で頑張っ、何かを拒否したり独自の動きをしようともがかないこと。それは必要ないどころか、妨げになるんだ。

感じてほしい、キミの回りにある大いなる声、動き、本能、直感。

君はわかるはずだ。

僕の声が、僕の意図が、僕たちがやろうとしてお互い調和の中で自分の役わりをこなすということについて。

では私の役わりを私に教えてください。私がうけとってみます。

そうだ、ではもう書くのはやめにし、肉体をそのまま、ちょっと置いておこう、出来るようになれば、肉体の意識を保ったまま連絡をとって、その動きが出来るようになるけれど、今は最初だから、いったんここで。

書いている方が繋がっていると思う。

なら好きなように。

僕が誘導するからもう一度、あの柱の中に行ってみようね。

僕が君の意識も取り込むから、どうぞ僕を自分と違うものと思わないでほしい。

僕の意識に入り込んできて。僕は君そのもののさらなる形であるだけなんだ。

ありがとうヨハン。

いつもの景色～メアリーの丘～

丘の上の草原からは、町が見渡せる。

お気に入りの場所だ。

少し抜け出したいときにここにきて、寝っころがって空を眺める。

靴ひもをほどいて、重い皮のブーツは脱ぎ捨ててしまうのが好きだった。

「はあー！」

伸びをすため息を一つ。深呼吸とは違う。

なにかを吐き出さなければ、息がつまりそうな生活を

ここにいる少しの間だけは忘れることができる。

そうやって生きた心地のする時間を確保しながら、

この世界でたった一人、彼女は13歳を生きていた。

草原の草が時折風になびく感じが好き。

ちょっと冷たい風が好き。

遠くでさえずる鳥の声が好き。

誰にも邪魔されずに一人で自分らしくいられるときが

何より好きだった。

メアリーには、家族はいない。

一緒に住んでいるおじさんとおばさんはいるけれど、

ただ、今だけ、少し面倒をみてくれているだけで

決して親切でもやさしいわけでもなかった。

裕福ではない暮らしの中、それでも食事だけは出してくれるのだから、

文句はいえない。

家に帰ったら、またお手伝いが山ほど待っている。

自分の大好きな本を読む時間など一分たりともなかった。

こうして学校帰りに寄り道して丘の上で風とお話するのが
内緒の贅沢だった。

この場所のことは誰にも教えていない。
見つかって奪われてしまうなんてことになったら、サイテーだ。

メアリーはまた
はあ〜と大きく息をはいた。

意を決したように、ぴよんと飛び起きて、
裸足のまま立ち上がった。

眼下に広がる町を見渡す。

「ここから見る町の景色が好き。
だけど、この町にはもどらない。
今だけ。あともう少し。14になったら、私はこの町をでるんだ」

そう心でつぶやいた。

「さよなら！またくるね！」

風に挨拶して、メアリーは元気よく走り出した。
自分で元気をださなければ、いい気分なんて向こうからはやってこない。

心の奥底にある淋しささえも友達にして、
メアリーはどこかに広がっているであろうキラキラした未来に
希望を持っていた。

きっと、私にも、そんな未来が待っている。

脱ぎ捨てたブーツは、おばさん家の娘、ケイトのお古で
もうボロボロだしとっても重たかったが
ないよりはましだ。

急いで拾って履くと、
夕暮れの町にむかって、一気に丘を駆け下りた。

そうだ、私は自分の人生を自分で切り開く。
こうやって風を切って走るように。

冷たい風をかき分けて走り抜けると頬が真っ赤に染まり耳は切れそうに痛い。
それがとても心地よくて、
今、生きてるといふ喜びが全身を覆う。

この感覚がたとえ一瞬でもあれば十分だ。
またこの丘にくる日まで生きていける。

ある男の最後

その足は獣の皮でつくった簡単な履物をはき、濡れた草むらの中を歩いていた。

足の感じからして大人の男だろう。

脛の濃い毛と汚れたふくらはぎが、野性的な生活を送っていることを物語っている。

森の中を進む男は、簡単なもので体を覆ってはいたが、それもすでに破れかけており、ひどく汚れていた。

ハア、ハア、ハア

男の息遣いが辺りに響くだけで、他に人の気配はない。

一体どのくらい森の中をさまよっているのだろうか。

もう男は、自分でもどこへ行こうとしているのか、なぜ歩いているのか、わからなくなっていた。

ドサッ

最後の瞬間は冷たい草むらの上だった。

顔に濡れた草が当たる。冷たい濡れた地面の感触。男に、もう力は残っていなかった。

草の上に突っ伏して、それでも目を開けている男の胸中には、ある思いがこみ上げていた。

「俺のせいだ、、、俺のせいだ、、、俺が悪かったんだ。」

今にも途切れそうな命の営みが最後に彼にもたらしたのは、母を苦しめ死に追いやったことへの後悔だった。

母のことで思い出されるのは、ごつごつした大きな手だ。

小さな丸太小屋の、木でつくったテーブルに座りながら、母は岩のような手で何か料理をつくっている。

黒く汚れが染みついた傷だらけの手だけ見たら、女だと思える人はいないだろう。たくましいその手は、生きていくために、子供を育てていくために何でもやってきた証だ。

しかしまたその手はよく、彼をぶった。その手は大きくて、まだ小さかったころの男の身体を吹っ飛ばした。

それでも子供を育て上げるために、母が何を思い、何をしたのか、男は知らない。

やんでいた雨がいつの間にかまた降り始めていた。

倒れてからどのくらいの時が流れただろう。もはや瞬きすらできない彼の目から涙が一筋、また一筋と流れ出た。

「悪かった。俺が悪かった」

それは、愛を受け取らなかったことへの謝罪。悪態ばかりつき、母を受け入れられなかった幼さを詫びる謝罪だった。

悔やまれるのは、愛することができた場面で、愛さないことを選んだこと。

愛を拒否し、愛であることを拒否した自らへの失望であった。

愛されていないと思い込むことより、愛しないと誓う方が罪深きことなのだと、この時気づいた。

愛であり損ねた無念さが体中に満ちたとき、男の命の営みは、終わりを告げた。

本格的に降り出した雨が男の涙に重なりながら

抜け殻となった肉体を急激に冷やしていった。

ヨハンのヒーリング

ヨハン、またものすごい眠気がきて、寝てしまった。

ヨハンにヒーリング方法を伝授してもらおうと思ってもねむくなっちゃってダメだわ。書きながら、実際に試すというのは、トランスにはいつている状態だからできない感じだし。

問題ないよ。

ねむくなるのは、いいことだよ。

ちゃんとトランスにはいつて脳波がそのような状態になっていくということだから。

僕からの語りかけの書き取りとヒーリングを同時に行うには、君の脳のチャンネルがもう一段階発展して、

本当の自動書記に近づいていくことが求められているんだ。

あと何回かやればできるようになるから気にしないで、トライしてほしい。

わかった。

ヒーリングについてのヨハンの考え方を教えて。記録しておきたいんだ。

基本的には肉体には、自然に調和のとれた健やかなる状態に戻ろうとする本能、力が働く。

ところがその元に戻ろうとする力がなんらかの別の力によって、止められていたり、

うまく作動しないようにセットされている場合、このなんらかの理由というものに働きかけて、

同じ目的...つまり調和した状態に戻るといふ、本来の流れにプラスの力として作用するように戻すことができる。

これをヒーリングと呼ぶ。

ただ、ある種の意図をもった力がそこに存在していると考えられるので、

それ自体は悪いことではなくて、力があるとみるんだ。

ということは、別々のプログラムで動いていた力を一つにするというプロセスをサポートしていくということ。

それをしているんだということに、しっかりと意図を合わせて、そして働きかけるんだ。

調和のとれた状態にするのは、肉体が本能でやるからね。

その肉体の本能をどこまでも信頼するというのが、まず基本のスタートラインだ。

その人の自然治癒力に欠陥があって、足りないから補うと考えるのとは全く違う。

自然治癒力に間違っているとか、足りないとか、欠けているというものはない。

すべて完璧にシステムに繋がっていて、行われるものだ。

さて、ではもう一度やってみようか。

はい。

自動書記はできるところまででいいから、まずは僕のヒーリングの方法を体験してほしい。

わかった。

じゃあまずまたあの草原を思い出して、匂や風を感じ、温度、音、色、リアルに。
そして光の柱に僕とはいるよ。入るときは僕と一緒にだ。僕と一緒に入って、その後光のエネルギーと融合する。

ここがあなたの第一関門だね。光の柱と融合して全体になるんだ。

そこまでやってみよう。

はい。

君がいる場所は？

春の感じ。結構風が温かい。そして風もある。この感じ、まとわりつくような。春。

あれ？だれがいる！

あの無念で死んだ男と丘の上の女の子だ。

そして、私。

もしかして、この草原の感じは一緒？景色は全然違うけど、

まさか、みんなこの光の柱で行き来しているの？

・・・ポータル？

光の柱はどこにでも出現できる。君がそれを意図して呼べばだ。

そうしてその柱はすべてを知っている。

すべてへのマスター室なんだ。今はそれをエネルギーを読むということに使う。

僕がサポートするから安心して。

さあ、あなたのいる緑の場所をもっとリアルに思い描いて、意識がしっかりそこに入るんだ。

そうすればすべての理解がキミにもたらせる。

ヨハン・・・書くことが維持できないよ・・・

ヨハンと光の柱

もう一度光の柱のやり方を教えるよ。もう一回最初からやってみよう。

さっき途中までやったから、だいたいのはわかるよね。

あのいつもの草原に大きな光の柱が立っている。

そして中にはいて、肉体を創っている概念を手放して、あなた本来のエネルギーにもどって、僕と融合しよう。

そこまでやってみて。

いいかい、君であることをやめるんだよ

私はどこにいっちゃうの？

どこにも行かない。

君がキミだと思っているその意識はどこにもいかないし、もともといっしょだということがわかる。

やってみて。許すんだよ。ただ、自分がなくなることをゆるすんだよ。

自分という幻想がなくなることをゆるすんだよ

しがみつくのをやめるんだ、自分という幻想に。それは執着だよ

大丈夫。、面白いから手放してみてごらん。

手放したい。手放したいよ。

だけど・・・だめなんだ。怖いんだ。

ねえ、光になることを頑なに拒んでいる・・・立ちふさがっているものの正体はいったい何？

ハートの保護膜

個であることから出るのを恐れている、ぎゅっと頑なな存在が何なのか、あなたはわかるかな？

・・・悲しいんです。とても。とても。私がダメだったから。

泣いているあなたは、いくつなの？

3歳。お父さんに、わかって気づいて欲しい。あなたも「愛なんだと。」
あなたも自由なる魂なんだと。あたしが愛することでお父さんの魂が気づくと信じて来たのに、それが起こらない。悲しい。お父さんを救うと誓ったのに、私のやり方が悪いから、助けることができない。

だからあなたはそこからでるのが怖いのか。ハートの膜の中から。

だってそうでしょ。保護膜だよ。なくなったら私をもっと傷つくかもしりれない。
愛を愛として伝えた行為が深く私を失望させたぐらいなのに。

あなたの力不足とかやり方が悪いわけではないよ。

お父さんにはお父さんのこの人生におけるミッションがある。それを全うしているだけだ。

そのことを見てもみれる場所までこないか？

そして自分でそれを見てみて、感じてみてはどうか？

・・・はい。

君の中の小さな三歳の子供も一緒に連れておいで。あの子に見せてあげよう。
あの時何が起こっていて、お父さんは何を選び、何を成し遂げようとしているのか。

はい。

そうして、そらは内なる底へと旅をはじめた。まだ幼い自分を連れて。

心の中に意識を向けて入り込んでいく。そこに現れたのは一つの大きな箱。

箱の中を開けてみたら、綺麗なお花がたくさんでてきて、辺りがパッと華やかになった。

カラフル。嬉しさがこみ上げてくる。そうだそうだ、子供の頃って毎日がこんな感じだったよね

。

幼き頃のうきうきした気持ちを思い出しながら箱を覗きこんで、ギョツとした。
何か得体のしれない塊がある。

「これは何？」

そっと触れてみる。

「犠牲者意識」という感覚がドーンと飛び込んできた。

玉手箱の中、お花、カラフル、犠牲者意識。

繋がっている。ハートで。私は父から、愛と虚しさを一緒に受け取ったのですか？

光と影はワンセット。光を受け取ればその分深い影も一緒にうけとる。

生きる虚しさ。一緒にもらっている。

それがハートを開くのを最後まで戸惑わせている、ハートを開かないように前にたちふさがっているもの。

人生、生きるとは虚しいものだという信念だ。

それは神の力の前でなすすべもなく打ちのめされた被害者としての意識から生まれている。

被害者がいて加害者がいるという世界。二元性の世界を確かなものとするために必要な信念だ。

それは自分の外に力を与え、自らが神になることを放棄する選択。

お父さんのものというより、人類のもつ集合的なもの。

お父さんの生き方がある面からみれば、生きることは虚しいものという想いを通り抜けさせて、昇華させようとしている行為といえる。これは本当に愛の行為なのだよ。お父さんの魂は自らがその膿の出口となって、被害者がいて加害者がいる分離の世界に真っ向から挑んだんだ。これは犠牲でやっているのではない。深いところで同意して、それを今回はやることで、自分のそして人類の抱えているもののバランスを取ろうとしている行為なんだよ。

お父さんは、数多く、支配的な人生を送ってきた。

そして自分が今世で学ぶべき課題を愛とともに、それを解き放つという仕事にしたんだ。

いいかい。

愛と共に解き放つことで、君にその分離の世界の存在を教えた。

君はそれを傷というなすりつけられたものではなく、

愛という温かい包みで受け取り、そして今、そのことを許そうとしている。

許すのは、人類が抱えている人間の矛盾をだ。

これこそが、お父さんという存在とお前との間でなされていた契約。約束ごとだよ。

だから、あなたは、力不足で父を救えなかったのではないんだ。

君は、見事にそれを受け取った。そして今それを「光と影という二元性の力関係」から「光その

ものである」という世界へと連れて行こうとしているんだよ。

さあ、偉大なる仕事だよ。

ハートを開いて一緒にその虚しさのエネルギーも光であることを許そうではないか。

ハートの保護膜を出たとき、あなたは体験することになる。

神というエネルギーの前で犠牲者として嘆くことと、

自我の策略をすべて手放して無条件に神のエネルギーを受け入れることのまるで違うことを。

二元性のフィルムをはがしたとき、

虚しさという形をまもって見えたエネルギーが一体何なのか、君はそれを目の当たりにして驚くだろう。

私が見ているその景色を君も一緒に感じてみてほしい。さあ、行こう。

これこそ本当の冒険だよ。お前ならいける。

お父さんの魂がまとっている肉体という乗り物に惑わされないで。

それがどんなふうに見えたとしても、それはお父さんのすべてではない。

光になるのではなく、光である。

教えを伝える本を開いた。あるフレーズが、まっていたとばかりに、その目に飛び込んできた。

・・・その時、男の中で何かが起こり、その人生を永久に変えてしまった。

自分の手を見、自分の身体を感じ、自分自身の声がこういうのを聞いたのである。

「私は光から作られている。私は星から作られている」・・・・・・・・

(『四つの約束』より引用)

触れた途端、その深いところで何かが動いた。

ヨハン、涙があふれてきたきたよ。

そうだ、私は光を通すパイプなるんじゃなくて、

自分自身が純粋なる光そのものからできていると、わかることなんだね、

自分の細胞を、自分の肉体を光そのものにしていくということなんだね。

だから自分の他のどこかに純粋なる光があって、自分がその光に入っていくって、そこに同調して

光にきてもらうのではなくて、うん、自分と光は同じもの。自分が光そのものだということなんだね！

そう、あなたはそれを許すことができるか。

光があるのみ。それがこの幻想を打ち破る最大のことなんだよ。

ずっと誰もがそのことを言葉でいつてきた。

だけれども聞いているあなたが、分離した肉体というものの中から聞いているから、この本当に意味するところを実感として感じるができないでいた。

『彼は、人間の知覚は、単に光を感受している光にすぎない、という結論に達した。』

光の中へ

ヨハン、ヨハンと連絡を取りたいです。

君が自分だと思っていることをやめれば、いつだって僕とつながれるんだよ。

ヨハン！

こんにちは！

ヨハン、あのメアリーの丘と、無念で死んだ男の草むらと私の大空が広がるいつもの草原と、

そしてヨハンの夕日が見える海岸は繋がっているの？

もしかしてどの場面にも光の柱が立っているの？

ポータル。それは外の景色の中に現れているじゃなくて、内なる世界で広がっているんだ。肉体と意識があるバランス状態になったとき、内面でつながる光の柱が出現するんだよ。通路が開くんだ。

それはどういう状態のときなの？

それは意識が最も今にあって、そこに体と意識が存在し、なおかつ生き残りをかけた自我に支配されていない状態。心地よい中心に収まった状態。

瞑想の境地のような？

そうだね。

あなたが指を動かさずこうやって内なる僕の声タイプしているときのように、他の自我と呼ばれる思考、マインドだね・マインドが動かなくなったときだよ。

マインドが常にうるさく話している最中は、たとえそれが自然の中でゆったりとしている時間であっても、

意識と肉体がポータルを出現させる状態にはならない。

僕が君と一緒にやろうとしているのは、

こうしてポータルを開いて、そして時と場所を超えて光を放射することなんだ。

そうすると、草の上で死んだ男の人の場所にも光を送ることができるの？

そうだよ。正確に言えば、送るのではない。一緒に同時に感じる事ができるんだ。

想いは、光より早い。ある一つの箇所に変化が起これば、それとついでになるところにも同じ作用が起こる。

これは科学でもあるんだ。進んだ知性の生命体ならば、同時性は当たり前で、それによって、過去は癒され、実は未来も変化する。

僕はあなたの過去であり、そして君の未来でもあるから、

僕と一緒にあなたが今ココで、ポータルを開き、同化することを選び、

愛を放出することに同意してそうあるならば、あなたの過去生であるあの草むらの男性も抱えているあるバランス点を手放すことができる。

あなたのチャレンジが成し遂げられたならば、

今の地上の生活におだやかに、しかし強烈に影響を与えることができる。

何度もやってきた人生という名のゲームで、何度も選びそこなったことがあった。

それは、愛であるという、選択だよ。

ヨハン、あなたは限りなく純粋に光としてエネルギーを下ろすことで
自らが愛であり、光であるということを試した人生だったんでしょ。

うん。だけど僕もまた、成し遂げられなかったんだ。

だから今こうして君と一緒にもう一度やってみたいんだ。

私と一緒に？

そうだよ。時を超えて、肉体も超えて、輪廻を超えて。

ヨハンに何があったの？ あなたは限りなく光であった存在ではないかと。

でもね。常にとはいかなかったんだ。

僕も人間だったんだよ。光があって、影があるという世界からは抜け出せなかった。

だけど、二元性の地上において、やっぱり光が強ければそれだけ闇も引き寄せ
るでしょ。

この逃れられないルールをどうしろっていうの？

逃れられない？？？

逃れられないでしょ

では本当にそうなのか、僕と一緒にやってみようよ。

一つだけ、僕を信じるが大前提だよ。

僕を疑う気持ちや、この世界についてのあきらめが心の中にあつたとしても
それこそがマインドが見せる幻想だと思って、耳を貸さないと決めてほしいんだ。
そうしなければ成し遂げられない挑戦へと今から君と行くんだからね。

わかった。すべてを受け入れ、すべてを信じて、ヨハンと一緒に愛であることを選び
ます。

よし。いいぞ。

では、深呼吸。またいつものように、タイプをしていることが出来なくなったら、経験を最優先
にしてね。

かくことは後でもできることだからね。

わかった。

肉体と意識のバランスを取って、マインドが静まる状態を創ります。

それには自分の呼吸を意識してそこにすべての意識を向けて、体はリラックス。
ふかーく息をしながらあの草原を思い浮かべよう。

あなたが一番リラックスしながら集中して、自分の中心でくつろいでいる状態。
その瞬間に、空は青く雲一つなく、風や音がとてもリアルに感じられ
すべてがピタッと止まって、静寂の中に入り込む

私の回りがすべて光の柱になって、

その中に水が湧き出るように慈悲の心が湧き出る泉があつて、
そしてあなたが私を抱きかかえてくれているんだ

愛さなかったことを悔いた男と

未来を思うあの娘と

そして私。

ヨハン。

あなたもまた、この時を待ち望んでいた

私が皆を連れていくんだね。

この地上に生まれた存在がそれを引き受けているんだ。
私があなたたちの代表としてここに来たんだ。
そうか。肉体にはそういう役目が。

肉体を持った存在の協力があってこそ、
過去生のそして未来の存在がこの場に集合することができるんだ。
そうなんだ。それが私の・・・私たちのミッションなんだね。
地上に降り立った存在がそれを思い出して、こうして協力することを
どうやったら思い出せるか、あなたたちはみんなでそれに挑戦していたんだね。

君も含めてね。君は自ら進んでこの役を買って出たんだよ。
そして、見事に今それをやっているんだ。
こうしてみんなで同じ光の中に入って・・・
光になるのではなくて、そう、君が光そのものなんだ。

一体何が起こるの？

さあ、やってみよう。経験してみよう。そして味わってみよう
私たちが一つであることの喜びに包まれて。

そらの目からは涙がどめどなく溢れ続けていた。
一体どのくらいの時間こうして光の中で融合していたのだろうか。
夕方のしばしの時間が、永遠のように思われた。

秘策

こんにちは。

耳を澄まして、心の中に無心で向かい合うというのは、大切なことだ。

さあ、あなたにこの世界の大切なそしてとても重要なルールを教えよう。

このルールはこの世で創造主として存在するための、つまり意図を純粹に物質化して世界へと転写し、またそこにおいて、楽しむための、重要な秘策といえる。

教えてください。

もうあなたは何度もこのことを耳にしてきたし、そして知ってもいる。

それが単なる知識ではなく、叡智となるための時間としよう。

はい。ありがとうございます。

我々は同じものからできている。それはエネルギーであり、視覚的には光としてうつり、感覚的には愛と呼ばれる感情を引き起こす。みな同じものを違う点からみて、言葉にしたものだ。

それからできており、それそのものを、神とよぶ。だから、あなたは神である。
わかるかね？

はい。神という素材からできているという意味ですよね。

素材、、、まあ簡単に言えばそうだな。

この素材は、何にでもなる。何にでも形を変え、質を変え、存在することができる。
変えているのが、あなたの中の、地上にいるあなたという存在だ。

はい。

では、ここまで理解したのだから、思う通りの現実を創造してごらん。

というと、途端にできない。と思うだろう。すべては全然思い通りではないし、うまくいかない。

自分にはまだその能力、現実化の能力がないと思えることもあろう。

はい、その通りです。

ここに、あなたの創造した世界がある。

あなたは、自分には、自分の思う通りの世界を創造する能力がない。と思っている。

そう思っているのだから、その通りの世界を現実をあなたは体験している。

さて、ここまでは、あなたも気が付いているだろう。ココからだ。

この奥にあることをあなたは、もう感じるができる。

つまり、思い通りにならないから、思う通りにしようとするという力が働く。

そして努力や、我慢や、成長や自己卑下や評価や経験といった概念が生まれてくる。

望む自分に近づこうと頑張ることで、あなた方は乗り越えたいと思っている。

乗り越えることで得られる自分は頑張って成長したという満足感、充実感、達成感を欲しいと思っている。

その達成感こそ、生きている証だと思っている。地上の人生の醍醐味だと思っている。

思い込んでいる。

・・・はい。その通りです。努力することがいけないんですか？

そんなことは言っていない。いいとか悪いとか正解とか不正解という話をしているのではないんだよ。

この世のルールを説明しているんだ。

あなたは自分が創った、自分が望む姿になるために努力するというルールでいかに満足感を得るか

充実した誇らしい人生を歩むかということにこの人生という名のゲームが置かれていると思い込んでいる。

しかし、そこではないんだよ。そこに目を向けている内はその世界観からは抜け出せない。

この地上のゲームは、思い込んでいるそういった一切のルールを脇へおいて、

どこまで自分を創っている素材である、光、神、愛、エネルギーを認識できるか、

というのは、自分の正体がそうであって、それで世界を創ることができるということを発見し、実験し、作りたいものを創るかという点にある。

もう一度作りたいものを創るために生まれて来た。

ルールの説明を受けて、なんだそういうことだったのかと納得してじゃあ、あれがやってみたい、こうしてみたいと

あなたが設定して生まれてくるのだけれど、残念ながら、そのルールを一旦忘れてスタートした

。

そうしてもう一度このように、地上にきてそれを思い出したら、
ここからあなたが設定した地上の夢を存分に楽しむ壮大なる実験へと意識して臨めるようになる

。

これを覚醒という。覚醒したら終わりではなく、ここからが始まりなのだよ。

私って覚醒しているんですか？

まだ覚醒していないんですか？

その質問が出るようなら、あなたはまだ覚醒はしていない。

知識としては知っている。それを自らのものとして使える生き方へとこれから進むとき、覚醒という状態が訪れる。

覚醒へと導くことはできるが、あなたの準備が整っていないとそれはまだ成し遂げられない。

逆に言えば、あなたの準備を整えば、一瞬にしてそれはおこる。

準備が整った状態とはどういう状態のことですか？

欲を手放すことを受け入れたとき。コントロールを手放すことを受け入れ、選択したとき。

なるほど。私利私欲のために動き、未来に期待している段階では、まだ準備中ってことですか？

理想の自分に近づこうというルールの中で、そう考えているのならば。

もちろん、好きなだけやっていいんだよ。

準備中の札はあなたがいいと思うまで、いつまでも掲げていていいんだよ。あなたが決めるだけなのだから。

ヨハンの正体

あなたに今一番大切なことから順番に伝えていこうね。

ヨハンなの？

そうだよ。

こんにちは、ヨハン。お久しぶり。

うん。君は忙しそうだったからね。元気にしているかい？

うん、毎日ばたばたとしているよ。それでも忙しさにまぎれて自分を責めずに済む時間が生活の多くを占めているだけ、まだ生きているのが楽だよ。

そうか。君がなぜ自分を責めているのか、わかるかい？

うん、いくつかのことはわかっているつもり。

自分には出来なかったという思い。

自分の本当の役わりから逃げているということを感じている自分。

やりたいことをやらせていないんじゃないか、自分を信頼していないんじゃないかという声。

そして私はダメだな~と思う。

そうやって、いつも自分を完全なる存在ではなく、一歩も二歩も劣った存在だとして

、その殻を仕方なく受け入れ、そしてそこからでようともしていない。

そのくせ、一生懸命やりたいことをしていない自分を責めている声が大きくて。

うん。

僕たちはその声をいつも心の中できき、そしてその声を聴きたくないから戦う。

自分と戦う、社会と戦う、自分の本当の気持ちに蓋をする。

目の前の手軽な欲望を満足させることで、自分の本当の願いに添ったと思い込もうとしている。

うん。堂々巡りの中から抜け出せない自分を、責めているんだと思う。

責めているのは、誰？

もう一人の自分の声、それもきっとマインドの仕業なんだろうね。

自分を責めるというのは、責める状態の自分を設定して初めて、責めることができる。
幻の自画像に自分をあてはめ、そしてまた一方の自分がそれを攻めたてる。
自我の最高におかしな戦略さ。負けるのも、勝つのも自分ってわけさ。

なんでそんなことするんだろうね。。。

本当の自分に向かうことが怖いからさ。

確かに。怖いよ。

怖いかい？

怖い。意味なく怖い。やめておいた方がよさそうな感じがひしひしとする。
高いというか。

リスクが

さあ、そら。

もうそここのところに踏み込んでみる時がきた。

君がいつも感じている、「本当の自分になることへの怖さ」についてだよ。

そう言って、ヨハンは優しく、でもしっかりと意志のある目で私をみつめ、にっこりと笑った。
その決意の前に、私はなすすべがなく降参するしかない。

そうだ、子供のころにはよく感じていたこの気持ち。

未知なる自分へと向かうときの何とも言えないこの慎重な感じ。

だけどもうそうなることは決まっているんだ。成長からは逃げられないんだ。成長は、起こるんだという絶対的な事実。四の五のいっても仕方がないので、幼き子供ながら静かにその時に備える。

いい意味での緊張と、大胆さ。変化することを受け入れた潔さ。

「ワクワクという名の状態には、必ず『成長』というワードがセットになっている」と、
つい先日車の運転をしているときに思った。

と同時に、そういうワクワクという状態をすっかりわすれていたことに気がついた。

そして今、私、きっとワクワクしてる。

今とは違う私になる。それは、確実なことなんだと、わかった。

抵抗してたのは、変化するということに対してだ。

変わることに抵抗する力。それもきっと自我の巧妙な罠なんだと、今なら軽くかわせそうだ。

ヨハン、

私が光の柱の中で「光を観察する光」になりきれないのは、変化することを恐れているからなんだね。

変化することとは、ハートの保護膜が守ってくれている安全地帯にしがみつくのをやめるってことだよ。

ハートの保護膜・・・そこに見えている幻想を今から観に行くの？

そんな幻想はないっていうことをね。

体が成長するように、あなたは成長する。

ホルモンのバランスが変わって、自分が自分でなくなっていくような感覚を思春期に味わったね。

そう、そして今からは意図をもって、さらなる自分へと変化していくよ。

怖がらなくても大丈夫。

それは多くの先陣たちが通った道であり、僕もまたやったんだよ。

君と一緒にこうしてまた時を同じくできることを光栄に思うよ。

そら。

そらはね、大いなる空。君の草原に広がる雲一つない大きな大きな青空と、
なにもない空（くう）の世界をつなげる奇跡。

君の存在は、奇跡そのものなんだよ。

そうじゃないよ、そんな大それたものじゃないよ。ってつぶやく声がする

うん。それが流れる雲だ。君の青空に現れた雲だ。

知らん顔していれば、雲はいつか消える。それだけのことさ。

私の青空。

雲一つないかしら。雲がまた流れてくるかしら。

それを創っているのは自分なんだよ。雲を書き入れたのは自分なんだ。小さな雲から、空を覆い尽くす雨雲まで、

あなたのハートに書き記したのは他の誰でもない、自分自身だということ。

そして、雲を今から書かなければ、もう増えることはないよ。

すっかり雲ばかりの空の場合はどうなるの？

雨は止んで、いつか晴れが来るんだと、まずは安心してね。

そうして、雲は消しゴムで消せることを知っておいて。

じゃあ、やってみよう。

はい。

あなたの空に、行ってみよう。

何が見える？

うん。真ん中は全部キレイな青い空だけど、画面の淵、輪郭が雲で囲ってあるように、みえる。

OK。本来の空の上に、雲の縁取りが書いてある透明フィルムが一枚かかっているとイメージするんだよ。

うん。

そうしたら、その雲の縁取りが書いてある一番上の透明フィルムをはがしてみよう。

どうやって？

大丈夫。剥がしてみると思ってね。

うん。

じゃあ、シールを剥がすようにそのフィルムをはがしてみて。

うん。あっ・・・剥がしたら、風に揺られて粉々になって消えてしまった。

うん。いいぞ。空はどんな感じ？

雲のないキレイな空だよ。だけどまだ雲を書けそうなフィルムがありそう。
何かまだ守られている感じがするよ。

よし、ではそのフィルムをはがす前にちょっとめくって、その奥をみてみよう。

うん。

あれ・・・めくれない。くっついてる。

何にくっついているの？

なんか空の端っこにある枠。窓枠みたいなもの。

枠があるんだね。空に。

うん。あった。

その枠ごとなくしてしまおうか。

どうやって？

ちょっと動かして御覧。

枠を？ 動くかな???

ああ、大きな自分になって、動かしてみたら、動いた！

なんて小さな枠の中から空を見上げていたんだろう。

なんて小さな枠の中を世界のすべてだと思っていたんだろう！！

大きな自分になったら、光の柱と背中で繋がったよ。そうして背中で光の柱から光を
もらいながら本当の空をみてるんだ。

何がみえるかい？

なんかすごくうれしい。涙が出てきたよ。感動してる。

ここはもうただ宇宙の中なんだね。全空間が繋がっている。区切りってものがないんだね。

それを区切ってみて一生懸命その中に入ろうとしていたんだね。そしてそこから出たいと思っていたんだね。

私は、宇宙の中にいたんだね。最初から。

さあ、そら

背中にくっついている光の柱にもっと同化して、中にはいってみよう。

光の柱と宇宙の空間・・・それも分かれているかい？

今はね。宇宙の空間に見えるところが光のないところで、背中から向こうは全部光の世界。そんな感じ。

じゃあ、光の世界の中に意識を持っていこう、光の柱も自分の中にあるって感じてみよう。

つまり、自分をもっと大きくなるということ？

やってみてごらん。ただやってみてごらん。ほら、僕も一緒だよ。

ヨハン

うん。柱があって自分がある。柱があって、宇宙がある。

そうやって区切っていることをまた一つはがしてみよう。その柱というものはがしてみたら何が見える？

柱を形作っている膜をはがしたら・・・

・・・ただ光があるよ。

そうだね。そしてそこに私がいる。

ねえ、この大きな私をまた剥がしてみるということだよね。

きっとこの宇宙が・・・この光が・・・それがすべて私だということなんだよね。

私だと思っているこの区切られた体のイメージを剥がしてみるの？

それとも、外側だと思っているものを受け入れるの？

区切りなどない。

あなたがそれをどのように体験しようが自由だよ。
さあ、自分で一番やりやすい方法でやっごらん。

ヨハン、あなたはどこにいるの？

すぐそばにいるから。

うん。

意識というものを流れ込ますだけなんだね。

意識をとめている膜と思う幻想を剥がしてみれば、すべてに意識が満ちるわけだね
。

ああ～そうか。ヨハン、あなたが何かわかった。
そっち側なんだね。ヨハン。

そうだよ。

ヨハン、あなたは私が私だと思って区切っている姿の外側の方、つまり宇宙であり光
である方のところの意識なんだね。

そうだよ。そうなんだよ！

じゃあ、あなたと融合するということ・・・

そうさ、僕たちは一つになるんだよ。

ヨハン。別々の方が認識しあえて楽しいんじゃない？

そんなたわごとには耳をかさないでよ、そら！

冗談だよ～。

そうか、何も怖くない。だって、一緒になるのは、あなた、ヨハンなんだもんね。

僕たちは融合したことは今までも何度もあった。

あなたが瞑想でコアにたどり着いたとき、
あなたが感動して涙を流したとき、
幼き頃に原風景の中、バランスしたとき、
そして今、意図を使って、そのことを行おうとしている。
あなたは、家の椅子にすわりながら、この状態を経験できるんだ。

懐かしいあの喜びを

自分というものにしがみつかないで。執着を捨てて、あなたは僕といっしょになるだけなんだ。
あなたの意識が宇宙全部、空を埋め尽くすことなんだ。
そうすることが心に中に神を持つということ。あなたは神として存在するということ。

これがハートの保護膜を超えるということなんだね。
そうか・・・肉体意識と魂意識の融合なんだ。。。これが魂意識が肉体意識にしよ
うとしていたこと。
ああ、、、ヨハン、あなたは私の魂意識なんだ。
そして私は恐れをなくして魂意識と同化した。
魂意識として今から生きるんだ。

そうだよ、そら！
そうなんだ。わかってくれたね！
僕は、キミなんだ。いつも言っていた意味が分かったね。
僕がキミだということが分かったね！
だから肉体を持っている存在の協力が絶対条件なんだ。
だって、肉体意識が同意して開いてくれなければ僕たちはこれを地上で成し遂げることはできな
いんだ。
そら、嬉しいよ！本当に、嬉しいよ！
一緒になってもヨハンとそらってちゃんとあるだろう。
だけどあなたはもう僕として語れるね。ヨハンとして語れるね。
魂として生きることができると。

うん。

これが、ハートの保護膜を超えるということだよ。

ああ、草原の少女と、草の上の男。
それは私の肉体意識の過去生。

その時に一緒にいたのが、ヨハン、あなたという名の魂意識なんだね。
私たち三度目の出会い？

もっともっとだよ、そら。

さあ今ならできるはずだよ。タイプしながら融合するというのが。

私たちの原風景に光の柱がたっているのは、あなたがそこにいるということ。
常に魂意識は私たちの中にある。そして、空は私たちのハートの保護膜を映し出し
ている。

保護膜の上に葛藤というものがあれば、雲を描くフィルムとなって何重にもかさなっ
ているんだね。

それをはがしてはがしていくと、空だけになる。

空だけになったとき、小さな枠の中から空をながめていた自分に気づく。

ちっぽけな枠を作り上げてそこから出ようとしていたことに気づく。

私は、もっと大なる意識だと知る。そして光の柱。私じゃないと思っている空と光の
柱があなただね。

あなたと私をわけている最終的な枠。

それをはがすことで、最後のハートの保護膜をこえていける。

私は、あなた。私はすべて。

すべては、光であり、すべてはただそのエネルギー。

自分をこんなにも大なるものとして認識したことはないよ。

私はここから創造していくんだね。

そうだよ。さあ、僕として語れるか。私として、話ができるか。

あなたがいつも私に語りかけていたあのフレーズ。

もう意味はわかるね。

私とともにあるあなたは、もう私として語っているんだよ。

「私は光を観察している光である。」という言葉思い出した。

そうだ、私だったらこう表現するな。

「私は光を含んだ光である。」

そこには光しかない。

すべては光のみ。

さあ、あなたのやることはわかったね。これからやること。

光として光と光を分かち合おう。

愛として愛と愛を分かち合おう。

エネルギーとしてエネルギーとエネルギーを分かち合おう。

それが交流というもの。

それが、わざわざ分離した幻想をみている地上だからこそ叶う
最高の喜びさ。

そして君がそれ以外のことをしたことは、過去から今まで一度たりともなかったのだと
自分を責めるもう一人の自分に言い聞かせてあげなさい。

あなたが愛でなかったことなど、一度もなかったのだということを。

そらから宇宙（そら）へ

そらの毎日は続く。

毎日がただの繰り返しだと設定したのは、いつのことだったか。

成長がとまって老いていくと、なぜ思い込んでいたんだろう。

きっともう背は伸びない。学年もあがらない。

だけど。

変化しない、なんて、無理だ。

変化が怖い、なんて、幻想だ。

キーボードの上で舞いだした指が紡ぐ、そらとヨハンの物語。

これからもきっと私は紡ぐだろう。

あなたと一緒に呼吸して、光として、話すだろう。

そして私は大きく、大きく、大きくなる。どこまでも、どこまでも。

ワクワクするぜ～。

そらとヨハンの物語

<http://p.booklog.jp/book/38672>

著者：そら

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/marupepori/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/38672>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/38672>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ